

今回は、世界遺産・合掌集落スタディツアーの報告です。

◇ 白川郷・五箇山を訪ね、文化遺産の保全・活用について学びました！

日 程： 2020年12月9日(水)

訪問先： 岐阜県大野郡白川村、富山県南砺市五箇山相倉（あいのくら）集落

協 力： 白川村役場 南砺市役所 南砺市観光協会 民宿「勇助」

参加者： 生徒15名 引率教員2名

◇ スタディツアーの概要

本年度、FRH事業の一環として、「世界自然遺産・屋久島スタディツアー」を企画いたしましたが、昨今の感染症の状況を鑑み、日帰り見学が可能な「世界文化遺産・合掌集落スタディツアー」に変更しました。

世界遺産で知られる白川郷・五箇山のまちづくりを、フィールドワークを通じて学ぶことが目的です。現地では、白川村役場、南砺市役所、南砺市観光協会の皆様にご案内していただき、合掌集落の歴史、伝統建築の保全、地域の人々の暮らし、インバウンド対応やコロナ禍の中の観光業の実態などについて、お話をうかがいました。五箇山相倉集落では民宿「勇助」のご主人から、貴重なお話の数々を聞かせていただきました。

SDGsの11番目の目標「住み続けられるまちづくりを」のターゲット4は、「世界の文化遺産及び自然遺産の保護・保全の努力を強化する」。今回、私たちはまさにその最前線の地を訪れ、限られた時間でしたが現地の方々と交流することができました。

◇ 参加生徒によるミニレポート

◆ [白川郷荻原地区] 合掌造りのある部分一つとってもちゃんとした理由や目的があることがわかった。例えば、白川郷は水路が多く張り巡らされていて、その理由は、火事が起きたとき、すぐに消火できるようにするためと、積もった雪を水路に落として溶かすというからである。

また村の観光課の方の説明で白川という村が、世界遺産に対してとても力をいれているということがとても印象的だった。今回のコロナウイルスの影響で外国人観光客が減って、厳しい状況にある時も、「どの店も廃業させない」という言葉には白川の昔ながらの生活様式を必ず守るという強い気迫を感じた。その一つの対応策としてキャッシュレス割引やGO TOトラベルと並行した割引プランを展開して、日本人が来やすいような工夫がされていた。

[五箇山相倉地区] 五箇山は白川郷より人の数が少なく、白川郷より景観を守るための規制が厳しく、何十年も前の暮らしぶりがそのまま残っていて、実際に住んでいる方々の生活がより近くて見えたような気がした。合掌造りの数も少なく、静かだった。白川郷は高山、五箇山は金沢との繋がりが強いため、生活様式が全く同じというわけではないということが驚きだった。民宿の勇助さんのご主人の話によると、規制されていても、子供が多く、村全体が一体となってイベントを開いていたり、インターネットが発展したりするので生活には困っていないと仰っていた。





〔白川郷と五箇山の共通点〕 両方とも、世界遺産ということだけあってとても景観に気を使っていたということが分かった。例えば、自販機が茶色く塗られていたり、電柱がたっていないかったり、看板がなかったりしていた。また、ガイドの役割がとても大きかった。五箇山で担当してくださった観光協会の方は、白川郷との違いを細かく教えてくれた。時折ジョークも混ぜながら、初めての人にも理解してもらえるような紹介になっていた。最後に外国人観光客について、白川郷ではどの看板でも英語の説明があった。五箇山ではガイドさんが英語を勉強し

ている。グローバル化が進むにつれ、英語の需要は高まっていくと思うのでやはり自分も他人事ではなく、英語はしっかり学習しなければならないと実感した。

〔感想〕 今回のスタディツアーは、もともとイギリスに行く予定でそれが屋久島に変わり、そして合掌造りに変わりました。始めはつまらなさそうと思っていたが、白川郷と五箇山の違いと共通点を見ることができてとても楽しかったです。また、自分達は美濃地区の世界遺産を研究してきたグループなので、とても勉強になりました。今週の土曜日には屋久島高校の人と、オンラインで交流するので、今回の体験も是非生かしたいと思います。

◆〔白川郷〕 まず一番の魅力として、白川郷の合掌造りを一望出来る展望台がある。展望台があることが白川郷の人気の理由でもあるらしい。実際に集落を一望してみて、普段生活している中では滅多に見られない貴重な美しさが目に焼き付いた。萩集落では、集落内の観光車両の通行を自主規制したり電柱を地下に埋めたりする等景観を守る取り組みをしている。確かに集落内のお土産屋の看板などが建物と同じ色でデザインされており、環境に優しいなと感じた。

合掌集落を保存していくために白川村の「結」(助け合いの精神)があり、屋根の材料である茅の確保や屋根の葺き替えを住民が協力して行っている。この葺き替え作業は片側を変えるだけでも約 1000 万円もの費用がかかる。とても労力のいる作業なのに 50~60 人で、1 日で終わらせてしまうという住民のタフさに衝撃を受けた。

さらに囲炉裏が暖を取るだけでなく、屋根をいぶすことにより茅を長持ちさせる働きもしていることも知った。また集落の至る所に水路が張り巡らされているのは、雪を水の中に溶かしこんで雪の溶けるのを早めたり、水路の水をホースで汲んで消化に当てたりするためだという。火災が起きってしまうと世界遺産がなくなってしまうという危機感を持って防災に心掛けていることが伝わってきた。

和田家の中を覗いてみると、2階は養蚕のスペースとして設けられていた。切妻造という構造にすることで、作業場のスペースを確保することができるそうだ。さらに釘は 1 本も使っておらず、マンサクという植物(ねそとも)を留め具として用いることで頑丈になると知った。合掌造りには様々な仕組みが備わっていることが分かった。知れば知るほどとても興味深い。冬景色の白川郷も是非、見に行きたい。

〔五箇山〕 五箇山というのは、山の名前ではなく、例えば美濃地方のような地域名を表す。五箇山には相倉と菅山の 2 つの合掌集落がある。五箇山は白川郷とは少し異なり、世界遺産に登録されているだけではなく、史跡に指定されていることを知った。史跡に指定されると、集落の原形を変えてはいけなくなるので、そのままの状態を保持するためにどれだけ住民の方々が尽くしてきたのかが目に見えた。





相倉集落は合掌造りが約20棟しかなく、住民もたったの60人しかいない。でもその分、村全員が集まりやすく、よくみんなで集まり、お祝い等をするそうだ。この話を聞き、合掌村の人々はこのようにして団結しているのだなと思った。相倉には原始合掌造りが現存しており、竪穴式住居のような形の建物を見ることができた。五箇山の合掌造りは昭和時代頃まで2千棟近くあったのにも関わらず、20棟まで激減してしまった原因は、電源開発であると聞いた。そこから現代のテクノロジーや便利な社会が伝統的な文化や建造物が消失するのを促進しているのではないかと気づいた。

民宿・勇助さんの5代目の主人の方にお話を伺ったところ、「昔の人たちは、寒くても我慢し続けていた。トイレも外にあったから夜でも寒さを我慢しながら行った。我慢することで社会性が身につくんだ。」と仰っていた。雪が多く降り、寒さが厳しい環境で長い間住んでいるからこそ言える言葉だとしみじみと感じた。やはり便利な空間にいてどうしても我慢をしなくなってしまうので、資源を浪費しないためにも今日学んだことを心に留め、できる時には我慢をしてみようと思った。

コロナ禍で観光客が減少している中、どれだけ多くの観光客を招き、かつ合掌造りの伝統を守っていくかが重要になってくると考える。観光客に白川郷についてよく知ってもらうことで、白川郷に対して保護的な意識を持つようになれば、やがて全国の世界遺産に対しても同じ意識を持つようになると思う。この意識によって、景観を守ろうという動きや節電や節水に心掛けるなど環境に気をつけて動く人が増えるだろう。



◆世界遺産に登録されている白川郷、五箇山の合掌集落ではその貴重な建築物を後世に残すために様々な工夫がされていました。

白川郷では、現在では業者がほとんど行っていますが、一方で「結」という相互扶助の精神のもと、村のみんなで茅の葺き替えを行う作業も続けられています。その結の精神は田植えや村の運営にもみられ、白川郷が、人が実際に住む希少な世界遺産として現存しているのは、村で生活する一人一人が助け合っているからなんだと感じました。

また、新型コロナの感染拡大によって観光客数が例年と比べて大幅に減少した白川村ですが、国内の観光客に足を運んでもらうため、宿泊割引 CP やキャッシュレス割引 CP などコロナ感染収束後にも生かせるような取り組みを行い、厳しい状況を支えているそうです。

そして五箇山は、白川郷とは違い国の史跡に登録されています。そのため村の建物を守っていくことはもちろん、新しく建築したり、道路を補強したりすることに国からの許可が必要です。ですから村の人たちはその土地でできたものを古くから続く伝統に則って最大限に利用し、循環型社会を築いているそうです。現代のわたしたちに求められている社会の姿を五箇山の集落で感じることができました。

わたしが二つの村を見て感じたことは、観光業を主産業にするためにキーとなるのは駐車場を整備することではないかということです。

どちらの集落でも観光客が徒歩で村を観光できるように駐車場が広く取られていました。こうすることで、事故防止や商業施設のスペースの確保ができます。わたしは関市の観光業を盛んにするにあたって、駐車場の確保を重視するべきだと思いました。現在関市に暮らす人のほとんどが移動手段として車を利用していると思います。ですが、車を止めるスペース

がなく、お店に入ることを諦めたり、祭りなど行事の時にスーパーやコンビニに違反駐車をしたりといったことがあると実際に感じます。だから、十分な駐車スペースを一カ所でも設置しておくことで関市に観光客が足を運びやすくなり、関市の観光業もより盛んになるのではないのでしょうか。

◆今回の白川村研修を通して、白川村の観光客の状況や伝統を学ぶとともに、白川村の美しさを直接目で見て肌で感じることができました。また、白川村には結と呼ばれる助け合いの精神が根付いています。今年は covid-19 の影響による観光面での苦労がある中で、村の方や役場の方たちが、結の精神に従って協力して白川村を盛り上げようとしている様子を見て、村の団結力を感じました。自分の住む県の誇りである白川村の保全と発展のための手助けができないか模索していきたいと思います。

五箇山の相倉合掌造り集落には、24 棟の伝統的茅葺建造物が現存しており、非常に景観の良い場所でした。集落の方の話の中に我慢の大切さについて内容があり、非常に感心しました。また、厳しい自然環境に耐え、養蚕を支えた茅葺きの建造物と自然が作り出す美しい景観に感動しました。

今回学んだことを家族や友達との話題にして、いろんな人に相倉の合掌造り集落を知ってもらいたいです。

◆[白川郷] 世界遺産である白川郷は展望台から見ると壮大だった。2019 年 1600 人の村人に対して 215 万人の観光客が来たのは驚きだった。オーバーツーリズムによって村人の対応が大変になっていることもわかった。しかし、まだ受け入れ態勢が整っていないだけだと、前向きに考えていて良かった。

合掌造りの建造物については、昔なのに現代の大工が驚くような技術を使っているみたいでとても驚いた。「結」は相互扶助の精神で僕達も見習うべき精神だと思った。

[五箇山] 白川郷と同じだったのは、同じような考え方で合掌造りがされているところだった。どうすれば耐震性があり、雪にも対応できるのかを考えた結果が同じ形を導いているのだと思った。また、白川郷と同じで養蚕をしており和紙も作っているとは知らなかった。民宿「勇助」で聞いた話では、我慢の話が一番心に残った。昔の人は少し寒くても我慢してきたため、肉体的にも精神的にも強くなっているが、現代人は科学技術の発達で我慢をすることが少なくなったため弱くなっているのではないかという話にはとても納得した。我慢というのは勉強にも当てはまると思う。今、たとえ自分が意味がないと思う勉強でも、我慢してすることで勉強以外の、精神力などが身につく、後々役立つのではないかと思った。



◆白川村では、養蚕などの伝統産業から観光事業に変わり、街並みや合掌造りを守るために、「結」という助け合いの精神で、屋根の材料となる茅の確保や、屋根の葺き替えを住民みんなで行っているというところが印象に残りました。また、合掌造りが火事に弱いことから、いたるところに水路が張り巡らされていることが、目的は違うけど、インカ帝国のマチュピチュのようだと思います。今はコロナの影響で観光客が少ない中、いろんな工夫をして、村長さんの「一件も廃業させない」という強い思いが伝わったので、一度家族で観光しに行きたいと思いました。その時は、家族に僕が説明したいと思いました。

五箇山では、現地の方の話を聞いて、今の自分たちはボタン一つ押すだけで解決できてしまうので、楽をし過ぎているなと実感しました。また、合掌造りの屋根に使う材料はとても貴重で再利用しながら無駄にしないことが印象に残りました。



◆白川郷では、養蚕から観光にシフトして、結という支え合いの仕組みで合掌造りを守っているのが印象的でした。白川村の職員の方が白川郷を「うち」と呼んでいて、実際に住んでいる人たちが愛情を持って協力して文化を保存する気持ちが去年までの観光客の増加につながっているのかなと感じました。

五箇山では、地域の高校生がガイド部として観光客を案内していると聞いてとても面白いと思いました。自分が住んでいる地域のことを、よそからきた人に紹介できるのは、故郷のことを深く知るチャンスだし、将来地域に残って貢献したいという村への愛着も育めると思うので、文化を守り伝えていくことにつながると感じました。

◆白川郷では、合掌造りのことについて詳しく知ることができた。一つ一つの作りに工夫が施されており、先人の知恵が現れていた。環境に合わせて、いかに文化を大切にしていこうという人たちの想いが伝わってきた。

また、お互いに助け合う「結の精神」に感動した。昔から、合掌造りは村人が助け合って作られており、現在も、行われていることに驚いた。コロナ禍でも、お互いに助け合って、観光業を活性化させていく村の団結力にも驚いた。僕は地域との関わりがあまりないので、地域の行事に積極的に参加し、「結の精神」を大切にしていきたい。

五箇山では、実際に合掌造りに住んでいる方に話を伺った。白川郷と同じように人の距離が近く、村全体で協力して活性化させていることがわかった。僕も、自分の地域の伝統産業についてより知って、次の世代の人に伝えていきたいと思った。

◆[白川郷] 白川郷で特徴的だったのは、村全体で観光を盛り上げようとしている点です。今年度のコロナの影響で、大きな影響を受けた観光業に対し、行政が6億円という莫大なお金をつぎこんだことは、白川村にとってどれだけ観光業が大切なのか、どれだけ力を入れているのかをよく表しています。

また、見学した和田家の障子に本美濃紙が使われていました。共に世界遺産である合掌造りと和紙をコラボさせる取り組みは、他にも応用できるのではないかと考えました。

[五箇山] 五箇山は伝統の保護に対する思いの強さが印象的でした。地元の方の話を聞くと、保護というよりは、ただ自分たちがしたい暮らしを続けていると言った方が適切かもしれません。若い人が多いという事実がその証拠だと思います。合掌造りの屋根の葺き替えにはかなりのお金がかかるのに、それを続けているところに地元への愛を感じます。やはり保護するにはそれに対する思いが必要なのだと思います。

今回の研修から僕の住む美濃市では何ができるのか考えました。美濃市にはうだつの上がる街並みがあるけれども、白川郷ほどの集客力はなく、観光業だけでやっていくことはできないため、本美濃紙を活用すると思います。白川郷の合掌造りのような歴史的建造物と連携して、障子などに本美濃紙を使用することで和紙のアピールができるし、相手の建物も見え目がよくなり、互いにメリットを与え合うことができます。美濃和紙が有名になれば、うだつと共に美濃市を盛り上げる足掛かりになるのではないかと考えました。



◆[白川郷] 合掌造りは、集落に住む人々がそこにある自然や気候、環境を理解し、共に生きていこうとしたことから出来上がったものだと思って驚きました。白川郷の人々は昔から今までずっと水などの与えられた資源を大切に使用していて、水路を見たときは美しく感動しました。また、土地は広くはないけど、その分二枚屋根にして2階のスペースを確保したり、地面で硝酸づくりをしたりして補うなど素晴らしい知恵もたくさん見られました。

便利な機械が増えてきた現在なら、屋根のふきかえも楽にできると思うけど伝統を残していくため、年に一回は結を行うなどの努力も素晴らしいと思いました。白川郷では、お話を聞いたり、見て回ったりするなかで、村の一体感がすごく伝わってきました。村のどこの水もきれいだったこと、合掌造りがたくさん残っている、しかも生活できるものが残っていること、村の人みんなが暖かかったこと、いろいろなところで結の精神が現れていたなど思います。コロナもきっと乗り越えられるだろうと心から思いました。

[五箇山] 相倉集落は小さな集落でしたが、白川郷と同様にすごく集落の暖かさを感じました。お話の中で、「史跡になったことで新しいものが作れないけど、あるものに感謝してあるものを使っていくことで生活できる。頑張っている。集落で生きるのが楽しい」という言葉がありました。便利な道具ばかりに頼らず、知恵や人と人の協力で自然と共に生きていることに感動しました。集落には約60人しか人がいません。合掌造りを残していくことや、たくさんの観光客を相手にすること、さらに自分たちもそこで生活できるようにすることはとても大変だと思います。それでも集落で生きるのが楽しいと言えるのは、集落の人々がみんなで厳しい冬を乗り越えたり、大変な作業をしたりし、そして喜ばしいことがあったら集落みんなで喜んで祝っているからだだと思います。話ぶりからも幸せだという思いが伝わってきました。僕も暖かい気持ちになりました。

[まとめ] 今回のスタディツアーでは、合掌造りのことを学ぶなかで、自分の生き方について考えさせられました。今僕の生活はとても贅沢です。電気も水もどれだけでもでてくるし、物が少しでも傷んだり、使い終わったりしたらすぐに新しい物が買えます。それが当たり前だと思ってしまっていました。でも今日の研修を終えた今は、当たり前だとは思いません。感謝して大切に使用していこうと思います。白川郷や五箇山の人々の知恵や努力に感動したからといって、エアコンを使わなかったり、道具を買わなかったりするのとは違うと思います。ただ、今ある物、与えられた物は大切に使用していこう、使うエネルギーも最小限にしよう、何か工夫できないかなと思い続け、行動して行くことが大切だと、そうしていきたいと思います。合掌造りのこと、今日感じたこと、白川郷、五箇山の素晴らしさをたくさんの人に伝えたいです。ありがとうございました。

◆僕は五箇山の名前は知っていますが実際行ったことはありませんでした。五箇山と聞いて思い浮かぶのは、山に囲まれたのどかな風景で合掌造りが五箇山にもあることは知りませんでした。五箇山には昔は合掌造りの集落がたくさんあったそうですが、ダムができてしまい今では数が減ってしまったそうです。また五箇山では、塩硝という火縄銃で使う火薬をつくるために床の高さが白川郷の合掌集落とは異なるそうです。同じ合掌集落なのに違いがあるのはとても面白いと思いました。

五箇山では合掌造り集落に今でも住んでいる人から話を聞くことができました。話を聞いていると世界遺産についてとても誇らしく楽しそうに話していると感じました。生活しながら世界遺産を守ることはなかなかできることではないのですごくいいことだし、このような人がいるから世界遺産として相倉の合掌集落地域も認められているのだと思いました。

今日の白川郷の見学で世界遺産として観光にとても力を入れているということが分かりました。僕が白川村で一番印象に残ったことは「結の精神」です。白川村には「結の精神」があると以前父から話を聞いていました。その時昔からやっても今ではもう「結の精神」がなくなっているのではないかと思います。しかし合掌造りを維持していくにはたくさんの人の協力が必要だし、萱の葺き替え作業にかかる1000万円の費用の大半を白川村が負担するなどのいろんな人が関わることで、「結の精神」は今もあるしこれからも続いていくと感じました。

白川村の観光に対する意識がとても高いと感じました。新型コロナウイルスの影響で観光客が今までと比べて極端に減った時でも、県をまたぐ移動が認められてすぐにキャンペーンを行い、合掌造りを見てもらうために、村が宿泊費用の負担やQRキャッシュレスでの支払いのときの割引などいろんな活動をすぐに行えるのは、白川村のことを大切に思っているからできたことだと感じました。白川村が予算の30億円のうち6億円ものお金を合掌造りに使うことは、普通の市町村ではありえないことだと思います。

関市にも刃物や鵜飼など日本国内だけでなく、世界に誇れるものはたくさんあると思います。なので、関市にあるよいものを白川村のように世界に広げるためにもっと関市のよさを今までになかったような画期的な方法で世界に広げていくべきだと思いました。

◆[白川郷] 僕は岐阜県に住んでいるけど白川郷という身近にある世界遺産に行ったことはありませんでした。テレビや教科書などでは見たことがあったけれど、実際に行って現地の方のお話を聞き、昔からの伝統を次の世代にきちんと繋いでいけるようにものすごく一生懸命に考え、そして周りとの関わりも大事にしている、とても感動しました。

[五箇山] 白川郷と似ていて合掌造りを今でもとても大事にしている、次の世代に歴史ある伝統をしっかりと受け継いでいけるように集落全体で団結していました。とても暖かい集落だなあ！と思いました。そして自分たちも、歴史ある伝統を尊重して大事にしていかなければならないと思いました。

◆コロナの影響で観光客は極端に少なかった。去年に比べ90%以上観光客数が減ったという事実もあり、白川郷ではGoToトラベルキャンペーンよりも早く国内誘客キャンペーンを独自に開催していた。集落で最大の規模を誇る和田家の2階には富岡製糸場から運ばれてきた蚕がおり、世界遺産同士の繋がりが感じられた。

五箇山では初めに、合掌造りの屋根の部分だけで構成されている建物があり、その建物から合掌造りの歴史を学ぶことができた。途中、移動式の売店が村にやって来た。コンビニやスーパーがない地域において、そのようなサポートは必要不可欠であり、また村の人々が集まり話をする機会にもなると思った。畑には合掌造りの屋根部分に使われてきたであろう茅が撒いてあった。使い古した茅は畑などの肥料にするのだという。有る物を工夫して使い、使い終わったら自然に返すという繰り返しの生活が、持続可能な社会実現に向けたSDGsにも繋がる所があると分かった。

民宿「勇助」のご主人は、現在の五箇山での生活に満足していらっしゃるようだった。というのも、国の重要文化財に指定され国からの支援はあるものの、土地と車があっても車庫を造る事が出来ないといった事実があるが、村全体が一体となってイベントを行ったり、合掌造りの葺き替えをする際に皆で協力したりと、団結力が感じられたからだ。合掌造りの歴史や人々の長年にわたる工夫から、自分たちの生活に生かしていけることを考えていきたい。

◆[白川郷] 私は、合掌造りならではの工夫にとても感動しました。火事になりやすいという特徴に対応して、まちの色々な所に水路やホースがあったり、雪が多く降るという気候に対応して、たくさん雪が降っても外に出られるように雪囲いがあったりと、本当に多くの工夫がなされていることを知りました。合掌造りは屋根だけが取れるような構造をしているため、地震が起きた際には建物の上の部分が揺れを吸収して下の部分のダメージが少なくなるということを知り、昔の人々の知恵や技術のすごさを感じました。また、産業と合掌造りがつながっていることにも驚きました。上の階に養蚕の作業場があり、そこをできるだけ広く使えるようにするために妻面を切り取っているため、合掌造りの屋根は2面なのだとわかりました。

白川郷の観光について、住民1600人に対して観光客約215万人が訪れて、オーバーツーリズムという課題が発生していると知り、観光地ならではの課題もあるのだとわかりました。また、外国人観光客が半分を占めていることから、外国の方々にもわかりやすいようにピクトグラムが使われている事が印象的でした。

私の町にも、外国人の方が多く観光にいらっしゃるので、これからの観光業を発展させていくためにも、外国人観光客に対応した対策をしていくべきだと考えました。そうすればさらなる外国人観光客の増加も見込めると思います。合掌造りが保存されてきた背景にある、「結」という助け合いの精神について、人々が協力して文化を守ってきた事がとても素敵だと思いました。また、この助け合いの精神はどの地域でも必要な事だと感じました。文化の保護・継承に繋がることはもちろんのこと、人々のつながりも深まっていくと考えるからです。茅葺きの屋根の片面を張り替えるだけで1000万円もの費用がかかることを知り、歴史遺産を守っていくためには、たくさんのお金が必要だとわかりました。でもそれだけではなくて、やはりその土地に住む人々の努力も必要なのだとわかりました。白川郷でいうと、助け合いの精神がそれにあたると考えます。私の地域にも、郡上踊りという400年の歴史がある文化財があるので、それをこれからも継承していくためにも、地域の人々が一致団結して、同じ思いを持って守って行かなければならないと思いました。

〔五箇山〕 風土や産業の違いが、民家の違いに現れるというお話がとても興味深いと感じました。同じ合掌集落でも、白川郷とは異なり、土間があったり、床下が高くなっていたりするということを知り、面白いと思いました。また、屋根で使えなくなった麻を肥料として使っており、持続可能な社会の構築に繋がっていることを知りました。資源を有効に使っていくことは、やはり生きていくために必要だと思いました。史跡に指定されたことで、法律による制限ができ、政府の「人の生活より大切なのは合掌造りを守ること」という考え方にはとても驚いたし、私が住民だったら怒りを覚えると思いました。

しかしそれ以上に、民宿「勇助」のご主人の考え方に感銘を受けました。保存しようという考え方ではなく、その村で楽しく生活しようという考え方です。世界遺産に住めるということを楽しみ、世界遺産だからこそ行われる式典やお祝いを楽しむという精神です。そこに住む人々が一致団結して、世界遺産を守りながら生活している事がとても素敵だと感じました。また、「勇助」の方には人間としての生き方も教えていただきました。人間は我慢して強くなっていく、我慢は大事、ということです。これは今コロナ禍にある私たちに繋がっていると思いました。そして、色々な人の考え方に触れることも大切だと感じました。お話を聞くことで、これからの自分の生き方に繋がったし、得るものが多くあったと思うからです。日々の生活の中で困難なことはたくさんあるけれど、今ある生活を楽しんでいきたいし、すぐに諦めることをせずに我慢することも大切にしていきたいです。